

## オンライン型学生海外研修報告書

### オンライン研修日程表

オンライン受講日	時間	オンライン研修受講内容
令和3年8月16日	9:30～13:45	アボリジニの文化について学習する。
令和3年8月17日	9:30～13:45	人の見た目の特徴を表す単語を学習する。
令和3年8月18日	9:30～13:45	絵を見て、どのような絵かをパートナーに伝える。絵をかいて表現する。
令和3年8月19日	9:30～13:45	何歳、子供のころ、成人など、人生の時期を表す単語の学習。
令和3年8月20日	9:30～13:45	自分や自分の家族の特徴についての説明をできるようになるワーク。
令和3年8月23日	9:30～13:45	オーストラリアの有名な場所についての学習。
令和3年8月24日	9:30～13:45	自分が好きな町についての説明。
令和3年8月25日	9:30～13:45	リーダーに必要な資質はなにかなど、リーダーについて話をする。
令和3年8月26日	9:30～13:45	休暇に何をしたかについて説明する。
令和3年8月27日	9:30～13:45	英単語について、英語で説明して、パートナーに当ててもらう。
令和3年8月30日	9:30～13:45	様々なことに対して、アドバイスとその理由について話す。
令和3年8月31日	9:30～13:45	スポーツについて話をする。動詞は何を使うか学習する。
令和3年9月1日	9:30～13:45	自分の健康について会話する。(食生活、睡眠、運動など)
令和3年9月2日	9:30～13:45	長生きについての話を読んで、問題を解く。
令和3年9月3日	9:30～13:45	文章を読んで、それについてのアドバイスを記述する。
令和3年9月6日	9:30～13:45	School of airについての動画を見て問題に答える。
令和3年9月7日	9:30～13:45	フォーマル・インフォーマルなメールの書き方。(宛名や文章の表現の仕方)
令和3年9月8日	9:30～13:45	学習の仕方について学習する。
令和3年9月9日	9:30～13:45	自分の友達や家族について文章をかく。
令和3年9月13日	9:30～13:45	オーストラリアの食文化について聞く。日本の食文化について話す。
令和3年9月14日	9:30～13:45	food sourceについての動画を見て、問題に答える。
令和3年9月15日	9:30～13:45	食べ物を表す単語を学習する。
令和3年9月16日	9:30～13:45	調理法について表現を学習する。
令和3年9月17日	9:30～13:45	値段の表現の仕方を学習する。

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科

氏名: 久保田未咲

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕</p> <p>授業を受ける前は、英語を話すこと自体に抵抗がありました。また聞き取りも苦手なので、研究室の活動でイタリア人と交流する機会がありましたが、極力話したくないなと思ってしまっていました。大学に入って英語を学習する機会が少なかったため、英語力が年々落ちてきている自覚はありましたが、そのまま放置してしまっていました。</p> <p>このCELTの授業は話す機会も多く、受け身にならずに参加できそうな授業だなと思ったので、参加することにしました。最初は着いていけるかが不安でしたが、自分のレベルに合わせたコースで学習ができたので、無理なく学習することができました。英語で会話するのは、言いたいことがあっても、うまく表現できず、もどかしい思いをすることが多々ありました。しかし、慣れていくうちに、自分が知っている単語やジェスチャーなどを使って何とか伝えることができるようになっていきました。言葉がでてこなくて、詰まっても何が言いたいかわかったクラスメイトが助けくれたり、先生が表現を教えてくれたりしたので、コミュニケーションをとることができたと思います。文法や単語が間違っている、なんとか自分の考えを伝えることができるのだなと思いました。</p> <p>しかし、授業の後半の方になると、会話のお題が難しく、なかなか自分の考えが表現できませんでした。今の力では、伝えられることに限界があるので、単語の勉強や、表現の勉強を行っていかねばいけないなと思いました。また、聞き取りが特に苦手で、会話をすると、質問の意味がわからず、答えきれないことも多くありました。聞き取りができないと、会話をすることは難しいと思うので、聞き取りも練習していきたいと思いました。</p> <p>また、オーストラリアの日本語を学習している学生と交流する機会もありました。日本の料理の名前を言ったら分かってもらえて、そのことで話せたのが楽しかったです。会話をする相手の住む国の文化を知っていることも会話をする上では大切なのだなと感じました。自分で興味をもつ積極的に学習していきたいです。</p> <p>自分が英語を話していて、相手の表情や反応によって、会話のしやすさが随分違うということにも気づくことができました。交流をしたオーストラリアの学生やCELTの先生は、ポジティブな反応を示してくれて、英語な下手でも、話してみようと思うことができました。たとえ英語が苦手だからと言って、相手から逃げたり、反応が薄くなったりしてしまうと、相手は話しにくくなってしまおう、と思いました。</p> <p>これから、海外の学生と交流するプロジェクトを行う予定があります。以前よりも積極的に会話をしていきたいと思います。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>12月にイタリア人と交流する予定なので、建築について、日本の学生とは違う考えをもった人たちとコミュニケーションをとることで、新しい視点で考えられるようになりたいです。イタリアは、建築物を保存していく考えが、日本よりも定着している国だと思うので、プロジェクトを通して、保存についての考え方を学びたいです。より多くのことを理解できるように、英語の学習を継続し、リスニングやリーディングの能力を高めていきたいです。研究室で、麓集落を保存するための活動などをおこなっているので、学んだことを、その活動に経験を生かしていきたいです。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科工学専攻M2

氏名: 程芳

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月30日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕</p> <p>5週間のオンライン授業を受け、非常にフレンドリーな講師の先生と話せたり、様々な国出身の学生と交流できたり、とても有意義な学びの多い体験だと思います。</p> <p>最も印象に残っていることは、授業の中で先生の解説が少なく、ほとんど生徒たちが話し合うのは日本や中国における授業の形式とかなり違うところです。毎日ひとつ一つのトピックについてグループでディスカッションやプレゼンテーションをやっていました。毎回積極的に自分の意見を英語で表現するにはどう言うかを考えてみることを実践しようと思いました。また、相手と意見の交換を英語で行うということへの意識が高まったのも大きな成果でした。さらに、この国際研修を通じて、グローバル言語である英語を使いこなせる語学力とコミュニケーション能力を向上できたと思います。</p> <p>議題に対して英語で自分の意見を相手に伝えることももちろん大切なのですが、何よりも国籍や文化を問わず、自分の常識と異なる概念や異文化を理解することがとても大切です。例えば、「arranged marriages」に関する授業では、インド文化が「arranged marriages」というのを主張する一方で、学生たちは「love marriages」の種も一つの選択肢と考え、楽しく喋りながら文化的な違いを知ることができました。グループのメンバーは価値観が広がり物事をより多角的に見ることができるようになったと感じ、異文化をリスペクトする能力を身に付けることができたと思います。</p> <p>この研修プログラムの後半は、2チームに分けられ、6人のチームメンバーとして「テクノロジーの活用と私たちの生活」についてのプロジェクトに参加しました。中国人の留学生として日本語会話能力が上手ではない私はチームディスカッションの備忘録を整理する役割を担わせて、とてもいい経験でした。日本人のメンバーたちと共同作業を進めために、英語や日本語でコミュニケーション活性化させるアイデアの交流を実現できました。専用サイトの構築に向けて、「resources」の課題を狙い、詳しい計画を立ち、みんなが分担することを決め、最後まで、私たちはグローバルチームワーク能力が最大限に発揮できたと思います。</p> <p>自己評価について、研修前に受験したスコアはTOEIC L&amp;Rが860点であり、TOEIC Speaking Testが120点でしたが、研修後に受験したTOEIC L&amp;Rが895点であり、TOEIC Speaking Testが150点でした。スコアにも反映され、この研修プログラムを通じて、自分の英語スキルやコミュニケーション能力が向上できたと思い、多くのことを学び、成長することができ、とても充実した6週間でした。この研修は私の人生にとってとても貴重な経験です。感謝を忘れることなく、将来に生かしていきたいと思います。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>地域のグローバル化や活性化のために、国際交流が非常に重要だと思います。私は鹿児島に住んでおり、多くの日本人や外国人の方々と話し、交流していきたいです。また、これから私がよく鹿児島国際交流協会の情報ページをアクセスし、興味があるイベントに参加してみたいと思います。そして、中国の知人に鹿児島についての観光や留学等の情報を紹介したいと考えます。それから、来年大学院修了後、内定先の会社で、外国出身の私は視野の広い考え方で顧客のニーズに寄り添いながら自分が積んだIT知識や技術を活かして、日本社会の役に立ちたいと考えております。将来は、帰国し、日本で学んだ様々な経験や知識等をアピールしたいと考えており、中日交流に少しでも貢献していきたいです。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科2年

氏名: 鳥越さくら

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学付属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>【研修を通じて学んだこと】</p> <p>研修前、私は英語で自己紹介するとき、名前や出身しか言えず自分のことを表現することが出来なかった。しかし、研修を行っていく中で、英語で自己紹介をする機会が増え、英語による自分自身の表現が可能になっていった。しかし、だんだんと可能にはなったが、日本より海外では自分の表現が大事であり、自分自身をより理解すること、性格や容姿のポイントを知ること、それを表現していくことの難しさや伝え方にとっても苦労した。日々の出来事の報告や予定を伝えていくことにより、日常的な会話も以前より話すことが出来るようになった。</p> <p>また、西オーストラリア大学の学生との交流では、はじめは英語の会話に入っていくことが出来ず、自分の意見を英語で話すことが全くできなかったが、回数を重ねるにつれて、周りの方の親切や助けにより、自分の意見を持ち、英語で話すことが出来るようになった。私は積極的な性格ではないため、日本語でも意見を言うことに苦手意識があったが、今回一緒に学んだメンバーや大学の先生、生徒の皆さんのおかげで、積極的に意見を述べることができ、その大切さについても感じた。意見を述べることで、自分について相手が理解でき、アドバイスなどがもらえること、英語のスキルに合わせて話してくれるようになること、相手の意見を引き出すことが出来ることなどを感じた。オーストラリアの学生や先生はどんな意見でも肯定的に受け入れてくれるため、意見を述べやすい環境であることを同時に感じた。そして交流の中で、日本では日常的に行っているものであっても、オーストラリアでは行われていないこと、コロナ禍での日常、文化や食事の違いなどを知ることができ、日本の中での常識のみだけで生きてきたので、違いを知れてとても興味深く、新鮮な毎日であった。海外の経験がとても少ない私にとって、オーストラリアのイメージであったり、海外の生活など情報として知っていることより良いイメージに変わり、また聞いて実際に教えてもらうことにより、より詳しいことが知れたように思う。一方でオーストラリアの学生が持つ日本のイメージなども知れ、日本はきれいなイメージがあるそうなので、クリーンなイメージを壊さないような生活を送りたいと思う。</p> <p>研修を通して驚いたのはリスニング能力が少し上達したことである。研修を受け始めたころは先生の英語の速さについていくことが出来ず、次にどの作業を行うべきか理解できず、他の方に教えてもらうことが多かった。研修の中で、英語の速さや聞き取るときのポイントなどが少しずつつかむことが出来るようになり、すべての話や単語については理解できていないが、流れなどがわかるようになった。日本語の場合でもすべての話を理解しようとしているのではなく、ポイントを抑えて日々聞いているが、英語においても同じであり、ポイントをつかんで話を聞くことが大切であると改めて感じた。</p> <p>日本の生活での慣れが、今回の研修を通して改めて再確認できたと同時に改めるべきこと、もっと挑戦し向上心をもって生活することが必要であると感じた。オーストラリアの学生や先生は新たなことへ常にチャレンジしているような印象で、私は慣れに頼ってしまっている状態であったので考え方や行動を今一度見直し、広い視野を持つための努力を続けていきたいと感じた。</p>	
<p>【研修後の抱負】</p> <p>私は4月から東京で働く予定だ。東京では地方より英語やグローバル化に直面する機会が多いと考えられる。そのとき今回の研修で学んだ積極性を忘れず、失敗を恐れずに挑戦し、英語や自分の意見を持つことを意識する。意見の正誤は考えず、広い視野を持つことの大切さや今回の研修の自分の経験などを伝えていきたい。</p> <p>地域のグローバル化については、今回私が取り組んだ研修は姉妹都市の関連からの取り組みのため、姉妹都市の取り組みを充実させたり、活用していくべきと考えられる。姉妹都市の海外都市を知ることから始め、地域が姉妹都市と取り組んでる活動を知り、積極的に利用し、そして周囲の人に勧めたい。また、グローバルキャンパで行った英語のウェブサイトや記事を作り、日本のことや地域のことを知ってもらえるような取り組みを行いたい。私は大学でプログラム作りなどを行っているため、その知識などを活かしてウェブサイトや記事作りをしたい。日々の生活で自分が行っていることとグローバルや英語を切り離して考えるのではなく、一緒に取り組むことを優先し、生活の一部にしていきたいと考える。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・1年

氏名: 西田紗綾

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学付属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕</p> <p>自分が持っていた一般的な考えが日本で生まれたために得られた考えなのだと感じる瞬間が多かった。政治や文化的な話だけでなく、好きな食べ物や幼い頃の思い出の話といったふとした会話からグローバルを感じた。研修中、同じクラスだった中国出身の学生と話す機会が多かったが、彼がいうには中国には朝食でシューマイを食べる習慣があったり、小中学校では植物を育てるような授業はないらしい。日本と中国は世界的にみて距離が近い同じアジアの国だが、知れば知るほどお互いに驚く慣習や文化の違いがあった。オーストラリアをはじめ、アメリカやイギリス等日本から遠く離れた国々と違いが生まれるのは想像していたが、研修を通して国同士の違いに距離は関係しないことに気づくことができた。</p> <p>また、他国を知ることが日本のことをより深く知るきっかけになった。授業で取り上げられた中で一番印象に残っているのは各国の医療体制についてである。一部の国では定められた一定の収入を満たした人が税金として医療費を払い、一定の収入を満たすことができない貧困層はその恩恵を受け、平等に医療を受けられるようなシステムが構築されている。私は自分が住んでいる国の医療体制についての知識がなく、平等な医療を受けられるための環境・仕組みについて意見をすることができなかった。しかし、同じクラスのメンバーは自国の制度を理解しており、他国と比較して日本の医療体制について意見をしていた。日本についてよく知ることがグローバルな考えをもつことに繋がるのだと痛感し、単に国際的な問題についての知識を増やすことだけではグローバルな視点や能力は養われなかったと感じた。</p> <p>私は自分の英語力を向上させたいと思いこの海外研修に参加した。何のために英語を学ぶのか、学んだ英語を今後どうするか等の目標がなかった。しかし、CELTでの授業中、「日本にはひらがな・カタカナ・漢字の3つの言語があるけれど、話すときにはどれを使っているの?」と質問され、日本語という言葉の認識が世界に浸透していないことを知り、日本のことを発信するために英語を学びたいと心から感じた。そして、まず自分が日本のことを理解し、そのことを世界に伝えたいという目標ができた。これはグローバルな能力を培うための第一歩である。本研修によって私はグローバルな視点と能力を得る方法を知ることができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>私が育った町は若者の流出が激しく、都市的な建物がない田舎町である。しかし自然が豊かであり、住民は人情に溢れ、日本人なら誰もどこか懐かしいと感じる文化や情景がある。日本の田舎町として私の出身地を知ってもらうきっかけとなるよう、英語でのHPを立ち上げたいと思っている。特産品や自然をはじめとした地域の日常や温かくて面白い方言があることを英語で紹介し、地域の美しさを感じて「いつか行ってみたい」と思ってもらえるような取り組みを積極的にしたい。鹿児島県は海に面しているので船舶で訪れることができること、地域のマップや交通手段、民泊や旅館・ホテルがあることを英語で紹介し、私の出身地の特産品をオンラインで購入したり足を運ぶきっかけをつくり、地域に貢献したいと考えている。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・1年

氏名: 増永成菜

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学付属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕</p> <p>私は5週間のオンラインクラスを受講して、特に英語のスピーキングの練習ができたと思います。私は英語が苦手ですが、この講義を受講したことで英語に対して少し自信がついたように思います。オンライン授業でしたが、講義には様々な大学の学生が参加しており、英語を使って様々なことを話すことが出来ました。また日本人以外の学生もいたため、日本と海外を比較したり、お互いの出身地について紹介したりと、非常に充実していたと思います。普段、英語を聞いたり読んだりする機会はたまにありますが、自分から英語で発言することはそれほどないので、英語によるコミュニケーション能力を少し得ることが出来たと考えます。</p> <p>講義の中で、西オーストラリア大学に通う学生と交流する機会もありました。週に二回ほどでしたが海外の学生の生活や本場の英語を聞く機会にもなりました。彼らの英語は、普段学んでいるアメリカ英語と少し違ったので、その違いを見つけることも非常に勉強になりました。また、リスニング用のCDやテストで聞くような英語とは違い、最初は聞き取るのが難しく感じることもありましたが、講義の後半では、少し聞き取りやすくなったと思います。</p> <p>講義内容で最も興味があったのは、オーストラリアの文化や歴史、アボリジニについて学べたことです。特にオーストラリアの先住民族であるアボリジニについては非常に興味深かったです。オーストラリアはイギリスの文化が元になっている場合が多いですが、彼らは独自の文化を持っていました。そして、オーストラリアの人々がアボリジニの文化を大切にしていることが伝わってきました。古くからの文化を大切にすることは大事であると再確認しました。彼らはアボリジニの言語を大事にしており、辞書を作ったり、歌にしたりして子供たちに伝えていました。日本でも跡継ぎや、過疎化の問題などで、地方に伝わる伝統や方言といった文化が少なくなっているように感じます。海外の文化を学ぶことで、日本の良いところや、問題点を改めて考え直すことが出来たので、このプログラムに参加できて良かったと思います。</p> <p>また、講義後に1時間ほどの自主参加の授業が週に何度かあり、時間が空いているときに数回参加しました。そこでは、パースの博物館や観光地などより深い文化について学びました。普段受けている講義と参加者が違うため、よりたくさんと学生と交流できました。時にはそれぞれの国の運転免許の話など非常にユニークなものもあり、自分の意見を英語で伝えるのは難しかったですが、楽しく英会話の練習ができたと思います。</p> <p>最後に、このプログラムを通して、様々な友達ができました。特に私のメンターとなってくれた学生とは、講義が終わった今でも週に1回オンラインでミーティングをしています。彼らと出会えたことが一番大切だと思います。彼は日本に興味があり日本語を勉強しているそうなので、英語と日本語を混ぜながら交流しています。英語を勉強するモチベーションにもなり、彼には非常に感謝しています。今後も、コミュニケーションを続けていきたいと思っています。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の研修で、英語のコミュニケーション能力を含め様々なことを学びました。これからも、英語での勉強を続けていきたいと考えます。特に、今回の研修で友達になったオーストラリアの学生とは連絡をとり続けたいと考えています。そして、英語のスピーキング能力が向上するように練習を続けていきたいと思っています。さらに、TOEICをはじめとした英語の試験を受けるなど、英語の勉強を続けていきたいと思っています。加えて、留学に対する興味も増しました。様々な留学制度を調べて可能なら参加したいと思っています。</p> <p>また、今後、今回の講義を通して学んだことを地域の活性化に役立てたいと考えます。例えば、私の地元は観光地で通常であれば、中国人や韓国人をはじめとしたたくさんの観光客が訪れます。今後も観光客がもっと増えてほしいと考えています。また、近年は外国人労働者が増えているように感じます。外国人とコミュニケーションをとるには、英語は不可欠です。もし、彼らと話す機会があれば積極的に交流してみたいと思います。彼らに鹿児島のすばらしさを伝えられるようにしたいです。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・1年

氏名: 松崎 太一

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕</p> <p>本研修では、同研修を受講している日本人学生間や研修先の先生方との授業内交流だけではなく、オーストラリアの学生や現地に住まう地域住民との交流機会を経て、異なる言語や価値観、文化に触れることができた。また、研修内では、現地住民との日常的・政治的な課題といった異文化交流及び修士課程における自らの研究内容を周囲に紹介するなど、様々なトピックに関して議論した。そこで、私は、自国の文化・国際問題などの社会ニュースに関する知識や自らの専門分野に関する理解が不足していることを実感した。また、会話の中で、それらを人に伝えるためのスピーキング力や相手の発現・質問の意図を適切に汲み取るためのリスニング力が大きく欠落していることを実感した。英語は日本語と比較して文構造が異なる。本研修を通して、英語を話す際は、日本語と同様の思考で文章を組み立てていくことは適切ではないと感じた。英語が第2言語である私にとって、英語を用いて自らの意見を正しく周囲に伝えるためには、その考えを頭の中で瞬時に整理し、抽象的にまとめ上げる能力が必要であると感じた。今後、私が国際交流を行うにあたって、正しい英文法を用いてコミュニケーションを行うためにも、紙面上での学習だけではなく、日本での日常生活の中で、これまで以上に抽象度・解像度を上げて会話する習慣を身に付けていきたいと考えている。</p> <p>また、本研修内において、わからなかったり聞き取れない発現があれば、相手にその質問を聞き返したり、自分の意見を周囲に伝える際には、様々なアプローチ方法で何度も説明するといった、コミュニケーションを円滑にするための工夫をした。そうすることで、時間は有するものの、自らの現在の英語能力であっても、言語が異なる環境下において適切に意思疎通が図れることを実感した。</p> <p>近年、グローバル化が急速に進み、国際間での共同研究やプロジェクトが盛んに行われている。世界には多数の言語が存在するが、英語はその中でも主流な言語であると考え。リーディングやライティング、リスニング、スピーキングといった、総合的な英語能力の向上は、今後、情報収集やディスカッションを行う上で、自らの選択肢の幅を広げると共に、アイデアの発想に豊かさをもたらしてくれると考える。</p> <p>現在、私は、将来の夢の実現に向けて、メキシコとフィンランドへの留学を計画している。日本とは言語や文化が大きく異なる2カ国において、現地住民との対話や議論、異文化体験を有意義な時間にするためにも、今後は、本研修で得た他大学や国際間での多様なネットワークを活かし、英語能力の向上に向けて学習を続けていきたい。本研修での体験は、自国の文化を再認識することだけではなく自らの視野や知見を広げる好機となった。将来は、多様な考え方を受け入れられる人材へと成長し、グローバルに活躍していきたい。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>現在私は、先端的なデザイン・ファブリケーションの現場での実践活動及び修士研究に関連して、北欧と中南米の異なる気候条件下で形成された伝統的な建物の現地調査を行うことを目的として、メキシコとフィンランドへの留学を計画している。近年、SDGsが採択され、建築の分野では、産業の基盤をつくっていくだけではなく、気候変動への対策や自然エネルギーの有効利用といった、環境負荷に配慮した設計を行っていかないといけない。これからの時代の建築を創造するためにも、環境・構造シミュレーション結果と建物形状を連動させながら設計することができる先端的な設計手法は有効であると考え。他方、伝統的な建物は、その時代で産出する地域固有の材料だけを用いて、快適な生活環境を形成していた。材料の特性を最大限に活かした伝統的な環境調整手法は、持続可能な社会の実現に向けた建築のあり方を考える上で、大きな手がかりになると考える。留学後、大学在籍時においては、留学で得た多角的・複合的な学びの成果を修士論文にまとめ、国内外での学会にて発表する。また、将来、留学先の教授や研究者、友人などの留学先で形成した多様なネットワークを活かして、共同研究や仕事上のパートナーとしてグローバルに活躍する建築士として、日本の建築業界の発展に貢献したいと考えている。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・M1

氏名: 水間 偉斗

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>【研修を通じて学んだこと】</p> <p>国際コミュニケーション特別研修でオーストラリアの先生や生徒からオーストラリアのことについてたくさん学ぶことができた。研修の内容としては、一種間それぞれPeople、Place、Health and Happiness、Language and Learning、Foodであった。例えば、Peopleの時には人の特徴などを表現する英語を学んだので、会話において人の描写をする場面はかなりたくさんあると思うので海外で英語を使うときに大変役に立つだろう。また、それぞれの週であった英作文の時間で毎回すぐに添削してくれるので自分の苦手だった冠詞や時制などの誤りを見つけ修正してもらえたので正しい英語を学ぶことができた。また、日本とは違う文化や先住民族など知ることができて貴重な体験となった。オーストラリアにはたくさん先住民族がいて言語だけでもかなり多くの種類が存在している。その中には消えかけている言語もあるぐらいだ。日本にも方言などは存在するが基本的には日本語一つなのに対し、オーストラリアはそのような言語があるとは驚きだった。オーストラリアの人と話をすると意外と日本のことについて知っていることに驚きがあった。日本の食べ物やアニメや漫画の話をするとかかなりのオーストラリア人が知っていた。なぜ、知っているのかと尋ねたら、日本の文化は繊細なものが多いからと言っていた。アニメや漫画など物語が繊細であるから面白いと言っていた。確かに私もアニメや漫画にとどまらず、日本の製品は繊細で美しいと聞いたことがあった。今回、オーストラリアの人と話してみても日本の文化が世界にどういう印象を与えているのかについて知ることができてよかったと思う。グローバルな能力としては英語のスピーキング能力が受講前に比べて格段についたと思う。受講当初はほとんど会話をすることができなかったが、授業や先生や生徒の話し方などを真剣に分析して自分も試しているうちに、少しずつ話せるようになってきた。また、勤勉な同期たちと一緒に授業を受けることにより自分も刺激を受けもって英語能力を鍛えたいと思うようになった。英語能力を鍛えたい動機としては、仕事をやるうえで必要になってくると考えたからだ。私はプログラマーになりたいと考えている。よりいいものを作るとなると日本人だけでなく、海外の優秀な人もコミュニケーション取ることが必要になってくるだろうと考えた。コミュニケーションをとるうえで、相手の言っていることを理解してあげることができ自分の考えを伝えることができればよりよいチームワークができ、よいものを一緒に作っていけるはずだ。通訳を雇ったり、機械の進歩で翻訳機が発展したりして意思疎通はできるようになるかもしれないが、間に何か入ってくるよりは直接コミュニケーションと取れる方がお互いにつながれると思ったから英語を勉強しようと思っているのだ。</p>	
<p>【研修後の抱負】</p> <p>オーストラリアのパースの学校では、生徒たちが私たちのサポートをしてくれた。サポート内容としては、個別に英会話の特訓をしてくれたことだ。そのおかげで少し話せるようになった。少し話せるようになったことで海外の人と話すことのハードルが下がった。英語が全く話せなかった時は道に迷っている外国人がいても、知らないふりしてやり過ぎて後悔していたがこれからは教えることができるようになると思った。困っている人を助けてあげることで、日本が暮らしやすい場所だと思ってもらえ日本に来てもらえることが増えグローバル化につながるのではないかと考えた。これから自分にできることはやっていきたいと思う。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 理工学研究科・2年

氏名: 油谷 直道

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学付属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕</p> <p>研修では、様々な国の学生と会話をしました。例えば、中国、サウジアラビア、オーストラリア等で生まれた学生などです。海外経験の無い私にとって、実は海外の人と話す事は非常に覚悟の要る行動でした。国際研究会などで海外の研究者から質問を幾つか受けた経験がありますが、気後れしてしまい上手く答える事が出来ませんでした。しかし、語学研修を受けたことによって海外の人を非常に身近に感じる事が出来るようになりました。例えば、UWAの学生とコロナ禍の各国の情勢について話しあったところ、各国の情勢が非常に似ている事が分かりました。今現在、日本でも音楽フェスが話題になっていますが、オーストラリアにおいてもクラブなどにおいて同様の現象が見られたりするようです。また、私は日本のアニメが好きなのですが中国出身のUWAの学生と日本のアニメについて盛り上がったりしました。他にも、鹿児島に詳しいUWAの学生と鶏飯について会話をしました。また、教員と関西の食文化について話したこともあります。私は関西出身なのでたこ焼きなどの話をして非常に盛り上がりました。結果的に、これらの経験は私の視野を広げたと考えています。海外の人と自分の体験や知識を共有できたのは初めての事で、海外経験の無い私にとってこれだけでも十分大きな収穫であり、この経験は私の今後の研究生生活においても非常に有益なものになると確信しています。</p> <p>また、同時に私の中の海外への興味関心が非常に高まっているのを実感しています。これからは、グローバル化だと言われ始めて数10年たちますが海外経験のない私には実感が無く、海の向こうの国は何処か別の世界にあるような非常に遠い存在で、特に興味も抱いていませんでした。しかし、語学研修で海外の学生や教員と意見を交わし、様々な価値観に触れることで異文化への興味が以前に比べ格段に高まったと確信しています。例えば、研修では海外の様々な宿泊施設について議論しました。氷で出来たホテルや、川や海に浮かぶ宿泊施設などについてです。こういった独特な宿泊施設はこれまでに見たことが無い物であり、ほとんどが日本には存在しない非常に興味深い物でした。他にも、オーストラリアの観光地について調べたところ、西オーストラリアには島全体を観光地にした場所がある事を知り非常に興味を惹かれました。その島では、スカイダイビングやスキューバダイビング、海での遊泳、魚釣り、BBQなどが出来ます。また、島全体において車の使用が認められておらず、自転車や観光バスでの移動がメインとなり、新鮮な空気の中で非常にリラックスした休日が送れます。こういう風に土地を大胆に使った観光地は陸地面積の少ない日本では聞いた事が無く、非常に驚かされたと同時に一度行ってみたいと思うようになりました。実は、語学研修を受ける以前は日本で研究活動を行える最低限の英語能力を得る為に英語学習を行っており、海外への興味は無く特に海外旅行したいとも思っていませんでした。しかし、英語を通して海外の異文化に触れる事が出来る事を実感し、私の想像を超える建造物や観光地を見聞きした事によって直接海外に赴き様々な異文化に触れたいと考えられるようになりました。こういった海外への興味関心の向上は、グローバルな視野を広げた結果だと考えています。また、今後海外のニュースなどにも興味関心を持つ事で、より一層視野を広げる事も可能だと確信しています。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>研修後の抱負は、国際的な研究会で活発に議論が出来る研究者になる事です。私は天文学を専攻していますが、これからは海外の研究者と情報交換を行い国際的な視野で研究を行っていくべきだと考えています。そういった活動の結果、鹿児島大学に海外の研究者を招くことも可能になると確信しています。海外の研究者を鹿児島に招く事は、鹿児島のグローバル化の一端を担う事が出来ると考えています。実は、平時では鹿児島大学において国際的な研究会が開かれることがあり、私も運営側として1度参加したことがあります。今後は、そういった国際研究会において、研修で磨いた英語能力を用いて運営により貢献できると考えています。</p> <p>また、私自身が海外に赴き鹿児島大学と海外の研究者や研究機関との繋がりを深める事も可能だと考えています。そういった活動は鹿児島大学における研究活動のグローバル化を推し進めるとともに、鹿児島のグローバル化にもつながると確信しています。これらの目標達成の為には、英語能力の向上が必要不可欠であります。その為、語学研修で磨いた英語能力を更に磨き上げ、今後も継続的に英語学習を行っていきます。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林資源科学専攻・1年

氏名: 池田希

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕</p> <p>研修を通して学んだことは、大きく分けて3つある。1つ目は人の前で発言するときに恥ずかしがらないということである。今まで、人の前で発表するとき、先生が誰かに応答を求めたときに積極的に発言することは少なかった。なぜなら、間違っていたら恥ずかしいと思っていたからだ。しかし、この研修をとおして、間違ふことは全く恥ずかしいことではない、ということ学んだ。これは、英語に限ることなく、日本語にも言えることである。2つめは、言語が違ふ人と話すときには、あらかじめ、その国についての文化やルールについて調べていたほうが、コミュニケーションをとりやすいということである。また、何が言いたいのかを想像するという力が身についたと思う。「自分の国はこうだから、理解できない」という固定観念を捨てることが大事であると感じた。3つめは、人脈を広げることである。多くの人と関わりあふことをなんとなく避けてきたが、UWAの学生の方々と一緒に自分のことや相手のことについて話すことがとても楽しかった。そして、楽しいと同時に、言語のListeningやSpeakingのスキルをあげることもできた実感している。どんなところに自分を磨くチャンスが転がっているかわからないので、より多くの人と関わりたいと思う。</p> <p>最後に、この研修に参加して、自分の考え方や取り組み方が変わったのは自分で実感している。とても良い経験だった。もともと、グローバルに対する考え方は少し持っていたが、さらにその思いが強くなったと思う。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>まずは、英語のスキルを磨き続けたいと思う。また、地域のグローバル化や活性化に寄与するために、まずは、鹿児島島の産業について理解し、海外の産業と比較しながら何かしらの形で発信して行きたいと思う。特に、自分の専攻について深く理解し、海外で行われていることを少しでも鹿児島に合ったように工夫しながら導入を促したいと思う。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産学研究所・1年

氏名: 石川佳芳

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>〔研修を通じて学んだこと〕</p> <p>研修中は常に英語を使用し、英語を使うことに徐々に慣れることができました。英語で気持ちを伝えることがはじめは難しく、“英語を話す”ということに強い抵抗を感じていました。英語を普段使うことがない私にとっては毎日が勉強で、どういったら伝わるのか、どんな時にどんな表現を使うのか、悩むこともありました。CELTの先生がよく使う言葉を注意深く聞いたり、一緒に研修を受けてきた人たちの使う表現方法をよく聞くようにすることで様々な英語の表現方法を知ることができました。</p> <p>実際に英単語を使うことで、これまで自分が理解していた単語の意味を深く理解することができました。話す際も何をどのように英語へと変えていくべきなのか、どの単語や表現方法を使うべきなのか、頭の中で英語での構成を考えながら話すことで、今まで以上に英語の文法や単語を理解することができました。</p> <p>研修が始まって何日間かは、何度も間違いをすることに恥じらひを感じていました。しかし、ボウ先生やCELTの先生たちが“間違えることを恐れずに話す”ことを強く伝えてくださったため、間違いながらも“英語を話す・使う”ことで自身の考えや気持ちを表現することの大切さを実感しました。日に日に英語に対する抵抗感や恥ずかしさも軽減したように感じています。さらには自身の感覚ではありますが、先生たちの話すことを理解できるようになった気がします。</p> <p>また、姉妹都市であるパースの文化や街並み生活を知ることができたことは良き経験と知識を得ることができました。パース以外にも、講義ではビデオやテキストを使用し、海外の考え方や語学における文化や生活も知ることもでき、充実した時間を過ごすことができました。異文化理解にもつながり、英語の語学の学習と同時に文化の理解をできたことが私にとって貴重な経験と学習となりました。</p> <p>研修内容としては、毎日テーマが決まっていた様々なテーマに触れていきましたが、日本人ではあまり討論することがないような内容や自身が今まで考えたことのない内容を深く考える機会もあり、これまで自分の中にはなかった考え方や視点を獲得することができ、思考・視点に広がりを持ったような気がします。日本の文化についても取り上げられ、今まで当たり前だったことが日本独自の文化であることを改めて実感しました。さらに、何回かパースの生徒の方々がボランティアで研修に参加していただいたことで、海外の人たちから見た日本や日本と海外との違いや共通点、実際の生活や現地の日をより感じるすることができました。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>この研修を通して自身の語学の未熟さや知識の浅さを痛感し、今後私自身が地域のグローバル化や活性化に寄与するためには語学のスキルを高めることや地域の活動に目を向ける必要性を強く感じました。また、英語を話す機会を自分から作っていかなくてはならないことを実感しています。身近に感じていたものは実は見えていない部分や知らないことが多く、地域の動きや目指しているものを把握し、自分の生活とのかかわりや将来のかかわり方を考え、できる限り地域貢献につながる活動ができればと思います。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産学研究科・1年

氏名: 石川圭大

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>【研修を通じて学んだこと】</p> <p>本研修を通じ、本学、他大学及び現地の学生や講師と英語を通じて意見交換をすることで海外文化の理解や日本の文化を顧みる機会を得ることができた。何気ない会話において、それぞれの国の食事や働き方、休日の過ごし方、社会に対する考えを共有したことで、海外文化の理解だけでなく日本文化についても気づかされたことが多々あった。そのため、英語で文法や単語を学ぶことはもちろん有意義であったが、何よりも英語でディスカッションをすることが大変面白く感じた。具体的には現地大学の学生や講師と家族、食文化などといったテーマ、地元や鹿児島といった日本のことについて話し、お互いの違いについて理解することができた。しかしそう感じた半面、やはり自身の英語の能力に欠点がたくさんあることも痛感した研修であった。ディスカッションを通してはスピーキングとリスニングの能力が培われたが、私は主にスピーキングに課題を感じた。せっかく聞き取ることができた英語でもそれを表現するのはまだまだで、もどかしさや悔しさをディスカッションの度に感じていた。しかしこれはこれからの私の英語学習における糧となり、早くスムーズな会話をできるようにになりたいと思っている。加えて、私の話す英語はとてもシンプルなもので会話があまり続かないということが多々あった。講師からのアドバイスを受け、積極的に話し続けること、興味を持つこと、質問することがとても大切であるということが分かり、研修終盤はより積極的な会話をできるよう実践を試み、冗談をいい笑いあうような会話もできた。また国による多様性のある考えに面白さを感じ、より理解を深めていきたいと感じた。私は本研修を終えるまで自身には留学をする語学力や自信は無いと思っていたが、本研修はそんな私に自信を持たせてくれた。そして今では私の専攻である観賞園芸学における探求を含めた留学を行い、語学力と共に向上を目指し、自身の研究、今後の進路につなげたいと考えている。かねてより園芸業界におけるグローバルなフィールドでの就職を希望している私であったが、その進路実現のためにも今回の研修はその第一歩であり、それが不可能ではないのだと感じさせた。本研修を修了した後の今感じることが、英語を話すということにおいて以前よりも各段に自信を持っているということである。本研修の間にもたくさん相手を困らせたことがあったが何とかして相手に伝えると努力した経験がそう感じさせているのだろうと思う。もう一つは英語能力向上という目的に対するモチベーションと積極性が増したということだ。本研修で英語を通じた各々の目標を持つ知り合いができ、多くの刺激を受けた。そして研修後の今でも、そういった人たちと連絡を取り続けており、今後の語学力向上におけるモチベーションの維持、グローバル社会における情報共有等をしていきたいと考えている。</p>	
<p>【研修後の抱負】</p> <p>まずは自身の語学力のさらなる向上を目的に継続した英語学習を行う。また本研修を通じて英語を使う、話すというアウトプットが大変重要であると実感したため、留学生や在日外国人の方とのコミュニケーションを通じ、それらを図りたい。また同時に鹿児島や日本の文化を共有することでグローバルな視野の獲得も図る。本研修先のあるパースと鹿児島市が姉妹都市であることから交流活動があれば参加したいと考えている。留学については未だ未定ではあるが、園芸分野の盛んである欧米、アジア圏を派遣先として目指し、実現したあかつきには海外で培われた知識・能力を存分に自身の研究につなげ、将来的に園芸分野における発展の側面から力を発揮したいと考える。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産資源学研究所・1年

氏名: 高藤 彩加

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学附属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>【研修を通じて学んだこと】</p> <p>5週間におよぶUWAのCELTの研修を通じて学んだことは、三つあります。一つ目は、自分自身や日本についてより知ることができました。授業内の様々なアクティビティにおいて、性格や経験など自分のことについて話す機会がほぼ毎日ありました。またJapanese student society(JSS)の学生とのディスカッションでは、日本について話すこととそれについて多くの質問を受け、文化や習慣、オーストラリアとの違いなどを共有しました。自分自身や日本についてその場で答えられないときは、授業後に調べて改めて考えることでより理解が深まり、次の回では答えることができたと思えるようになりました。二つ目は、特に話す能力、アウトプット力の向上につながりました。CELTの研修ではクラス内でのSpeakingやJSSの学生とのディスカッションなどの会話の機会が多くありました。会話の中で意識した点は、会話を途切れさせないことでした。日本語は会話の途中でいったん考える「間」を大事にする傾向がありますが、英語は話題が全く異なっても途切れることがないということに気づきました。それは相手についてももっと知りたいと思う気持ちが強いのだろうなと思いました。初めはその英語の会話のテンポに戸惑うことが多かったのですが、回数を重ねるにつれ慣れていきました。とにかく質問してみようや、相手の会話からこれについてはどうということだろう、もっと会話を広げようと思う気持ちが強くなりました。これまでの一方的だったり、yesnoだけなど途切れたりする会話が改善されていき、「間」も大事にしながら、会話のテンポに対応できるようになりました。三つ目は、英語を学ぶ理由が自分の中でより明確になりました。それに気づいたのは授業後の先生との会話の中で先生も自分も好きなジブリについて会話した時でした。ジブリの子どもの時と、成長してから見た時と感じ方が違う、という点を伝えたくて、文法や単語に苦労しながらも伝えました。特に単語では、自分が伝えたいこととマッチする単語を探すのが難しく、よりマッチする単語があるだろうと思うことが何度もありました。ただ、自分の言っていることはこういう意味だよ、と先生がアシストしてくれたことで、伝えることができました。これまで英語を学ぶ理由は、世界中の人とコミュニケーションをとるためだと考えていました。この考えは変わっていないのですが、今回気づき追加したのは、相手の伝えたいことや考えていることを時には相手をアシストしながら理解しようとするためにも英語を学ぶ理由だと思いました。それはまさに先生が自分に対して会話の中で行ってくれたことでした。相手が文法や単語がわからないとき、ジェスチャーなどもコミュニケーションの一つでそれで伝えようとする時、自分なりに解釈して、それを相手と伝えたいことが合っているか共有するときに英語はグローバルなツールとして重要な役割を果たしているなと思いました。</p> <p>今後留学を考えています。英語の学習を続け、この経験を活かしたいと思っています。またこの研修は英語へのモチベーションアップになりました。研修で出会ったクラスメイトやUWAの先生たちとの交流も続け、英語の学習に取り組みたいと思いました。</p>	
<p>【研修後の抱負】</p> <p>CELTの研修は、自分や日本について知るきっかけになり、それをアウトプットする機会が多くありました。紹介もクラスメイトと協力して行うことでお互いの知識を補え合うこともできました。しかし自信がない点もあったので、そこを改善する必要があると思いました。その点では、話すだけの情報発信だけでなく、ビジュアル化することも重要だと思いました。授業内のミニプレゼンテーション発表では、スライドで発表したほうがわかりやすく、特に母国語でないときは文字や写真を見ての方がわかりやすいと思ったので、ビジュアル化は情報発信において効果的だと思いました。自分は、今後留学を考えています。その機会に、日本や自分の地元を紹介する際に、自分の言葉で、自分のおすすめを自信をもって紹介できるように、もっと知りたいと思いました。留学の前に文章としてまとめたいと思いました。そして、帰国後は行った先の情報を知ることができたら、それを他の人にも共有できるよう情報発信に取り組んでみたいと思いました。それが日本や鹿児島への旅行客集客につながるとういことなと思いました。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 農林水産学研究所・修士1年

氏名: 田中紗英

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学付属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>【研修を通じて学んだこと】</p> <p>今回の研修で英語だけでなく、多くのことを学び、そして自分自身成長することができた。</p> <p>まず、伝えようとする大切さを学んだ。私は最初英語を話すことへの自信がなかった。間違ふことが恥ずかしいことではないと分かっているにもかかわらず積極的に自分から自分の意見を言ったり、問題の答え合わせをしようと最初に発言したりすることが最初でできなかった。自分の英語が拙くて、それでも伝えようとしていたら、他の人が言いたいことを理解してくれて代わりに彼女はきっとこんなことが言いたいと思っていると伝えてくれることもあった。次は自分がそのように相手の意図を汲んであなたはこういうことを伝えようとしているんだよね？ということ？と助けることができるようになりたいと思った。文法が正しくなくても語順が間違っているでも自分が知っている単語でなんとか伝えようとするその姿勢が大切であることを学ぶことができた。授業を受けていく中で、自分が少しずつ自分の意見をとにかく伝えよう、発言しようと思えるようになっていった。また、最初の方は1対1のグループワークでも「始めましょうか」「私からいくな」などと言えなかったのだが、だんだん2、3人のグループでもそういった会話を始める最初の一言を言えるようになったところは自分が成長できた点だと感じる。</p> <p>そして、リアクションの大切さを学んだ。これまでの生活を振り返ると普段の生活で私はリアクションがどちらかというと薄いほうだったと思う。CELTの授業では1対1や何人かのグループで話す機会が多く設けられていた。自分が言った意見や考えを話した後、リアクションが薄いと自分の言いたいことが伝わってないのかな、言いたいことは言えたと思うがしんとしててなんだか気まずいと思うことが何度かあった。きっと他の人も同じように思うことはあったのではないかと思う。だからこそ、「私も同じような意見だよ！」「言いたいこと分かるよ！」と言っても反応を示すことが大事であると学んだ。また、同じ意見でもそれを考える理由はひとそれぞれであるため、「私も同じ意見だよ」と終わるのではなく、私はこういう理由からこの意見だと理由まで伝えることが大事であると思った。</p> <p>そして、自分の意見を持つことの大切さを学んだ。</p> <p>CELTの授業では自分の意見を話すという時間が多く受けられていた。UWAのJSSIに所属する学生とも話す機会を設けていただいた。その中には普段は考えないような話題も数多くあった。普段考えないような話題のため、自分の意見を言うことができない場面があった。例えば、What are your feelings towards your own language?というような質問だ。なんとか考えようと思ったのだが、なにも自分の意見を考えることができず、なにか「思いつかない」「考えが今まとめられない」などと言言うことができればよかったのだが、無言のままできてしまった。その時はとても悔しかった。いつもは難しくても一言でも理由が言えなくてもなんとなくこうだと思うということをいう努力をしていたのだが、その時は何も言えなかった。これ以外の質問でも答えられない・何も考えが出てこないときがあった。今振り返ってみると、ネイティブの学生相手に緊張してしまっただけでなく、普段自分がいろんな話題に対して深く考えること、理由を持って自分の意見を持つことをしていなかったためであると考えられる。普段流れるニュースに対し、なんとなく見るのではなく、自分はこういう考えだ、なぜなら…と深く考える、自分の考えを持つという練習をしなければならないと思った。UWAの学生やクラスの人と話したトピックについて見直して、改めて自分の考えをまとめてみたいと思う。</p> <p>さらに、自分の国の文化や歴史について正しく知っておく必要性を感じた。CELTの授業ではオーストラリアやパース、先住民のことを学ぶ機会が多くあった。日本にはない世界が広がっており、とても興味深かった。学校というトピック一つとっても、友達になったUWAの学生はjunior high schoolはないということを知ってくれた。また、オーストラリアにはschool of the airという学校があることを初めて知った。日本とは全く違う食文化についても学んだ。それと同時に自分は日本や地元である熊本、鹿児島文化や伝統などについて実はあまり知らない、「あなたの国や住んでいる町について教えて」といわれても紹介することが難しいと思った。一度地元の郷土料理について話す機会があり、自分も好きな郷土料理を紹介しようとしたのだが、うまくできなかった。私自身海外の文化について知ったり、学んだりすることは好きなのだが、日本のことについても学んでおかなければならないと感じた。まずは日本のことを知り、そして相手の国のことを知ることで、両国の違いを比較できたり、似ていることを見つかけたりすることができると思った。また、その違いが生まれた背景も深く考えることができるようになっていった。ただただ違う国の文化を知るだけではなく、自分の国・地域のことを知ってこそ自分の視野や考えが広がったり深まったりすると考えた。</p> <p>今回の研修で英語を学んだがそれ以外にも多くのことを学んだり、考えたり、感じたりすることができた。研修に参加させていただけたこと、CELTの先生方、Bo先生、橘先生には感謝しています。今回学んだこと、研修で成長できた部分を今回の研修で終わりではなく、今後の生活に活かしていきたいと思えます。</p>	
<p>【研修後の抱負】</p> <p>今回の研修を通して、自分の英語力のなさを痛感させられた。言いたいことを思うように伝えられなかったり、会話をしたくても相手の言うことを聞き取れなかったり、理解できなかったりして、何も言うことができずに悔しい思いをする場面が何度もあった。今回お世話になったCELTの先生からおすすめ勉強のサイトを教えていただいたので、そのサイトを活用したり、日々の生活で自分の考えていることや発言を英語ではどういこうだろうかということをノートにまとめたり、声に出して言ってみたりして、英語学習を継続していきたいと思う。また、CELTの先生がUWAの学生と繋げてくださり、研修中だけでなく、現在も毎週1時間ほど会話をしている。現在は最近何している？というような身近な話題を話すことが多いのだが、パース市のことやオーストラリアの文化のこと日本の文化のことなどについてこれからさらにディスカッションしてみたいと考えている。ディスカッションすることで英語力向上だけでなく、地域や文化の違いなどの背景による考え方の違いを学ぶことができ、自分の視野も広がるのではないかと考える。地域のグローバル化や活性化について具体的に自分にどのようなことができるのかは今後考えて行く必要があると思う。しかし、まずは自分自身の英語力の向上と自分の視野を広げることで、地域のグローバル化や活性化に貢献できる人物になりたいと考えている。</p>	

## オンライン型学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

## 【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年)：農林水産学研究科 博士前期課程2年

氏名：姫野 絢圭

授業科目名	理工系国際コミュニケーション特別研修科目
研修先(大学・国・都市名)	西オーストラリア大学付属語学学校CELT(オーストラリア・パース)
研修期間	令和3年8月16日～令和3年9月17日
<p>【研修を通じて学んだこと】</p> <p>本研修を通して、①英語力のさらなる向上に努め、②様々な価値観に触れ、③人前で話すことへの抵抗を減らすことが出来ました。</p> <p>私が、本研修に参加しようと思った理由は主に三つあります。まず第一にオーストラリアアクセントをマスターしたいという想いからです。私は日頃、東南アジアの学生や人々と関わる機会が多く、東南アジアアクセントで困ることはないに等しいくらいです。ですが、英語圏の方とは縁が薄く、あまり馴染みがありませんでした。中でも、オーストラリアの方は話すスピードが速く、聞き取るのに苦労をしていました。いち早く彼らのアクセントをマスターしようと意気込み、動画配信サイトYouTubeでオーストラリアで有名なYouTubeチャンネル“Oz man review”の動画を視聴しましたが、字幕なしでは内容を理解することが出来ませんでした。それが今では字幕なしで理解できるまでに至りました。また、コロナ禍でもオンラインというツールを最大限に活用して国際交流をしようと思ったのが二つ目のきっかけです。私のクラスは、鹿児島大学の学生(私と中国国籍の学生)、関東・関西の大学生、西オーストラリア大学の学生(ベトナム・中国国籍)、主婦(ペルー・スペイン国籍)で構成されていました。多国籍なクラスではありましたが、日本人学生の割合が高く、国際交流というよりも大学の授業という雰囲気でした。ですが、九州からは私達のみで、他大学の学生は本州から参加していたので国際交流と同時に国内交流も出来、濃い時間を過ごすことが出来ました。最後に、何より英語の文法の学びなおしと語彙を増やしたいという想いも参加へのきっかけとなりました。参考書や単語帳を開いて、一人黙々と勉強をするのではなく、グループワーク中心の授業でした。習った直後に実際に運用してみることで、体と脳に効果的にしみこませることが出来たと感じています。学術的な単語や興味の範囲にない領域の単語は、日常生活で使ってみる、ということは中々叶うことはないと思います。私は、芸術作品にあまり興味を持っていないため、芸術作品がテーマであった週は、話す内容を考えることが大変で、有名な芸術家の名前を含む単語に悩まされていました。ですが、実際に使ってみる、知ろうとしてみることで、語彙力が高まると同時に教養も深まりました。今回のように授業やグループワークが無い限りには、私の日常生活にとって縁遠い単語達が私の口から出てくることはあまりないと思います。これからは、選り好みせずに様々なトピックに関する記事に目を通すことで、グループワークの代わりに何度も目を通すことで頭に入れていきたいと考えています。</p> <p>本研修を通して、①英語力を向上させることが出来たということは言うまでもありません。研修参加前に心に抱いていた野望である、ネイティブオーストラリア人のように物凄いスピードで英語を話せるようになる、ということは5週間では叶いませんでしたが、聞き取れるようになっただけでも十分な収穫だったと考えています。国際・国内交流および興味の範囲外にある領域にも関心を持つことで、②様々な価値観に触れ、視野を広げることが出来ました。また、日本人学生が多かったことが功を奏しておまけで苦手を少し克服することが出来ました。私は、自分のプライドのせいで日本人の前で英語を話すことに抵抗がありました。「○○なのに、このくらいしか話せないんだ」「日本人なら日本人らしい英語の発音しなよ」など、他人から自分の英語力に関するラベリングをされるのを恐れて、今まで出来るだけ日本人がたくさんいる場で英語を話す場面を避け、いざ音読等を求められた時は、「ジャパングリッシュ」を話していました。そんなプライドにがんじがらめになっていた私にとって、参加者がほぼ日本人という事態はやって来て欲しくありませんでした。ですが、事前のクラス分けテストのおかげでクラスメイトは大体同じ程度の英語力であったため、あまり、気負いせずに話し始めることが出来(それでもはじめは先生からも分かるくらい緊張していましたが)、③人前で話すことの恥じらいを減らすことが出来ました。世界の共通言語である英語をマスターすることは、グローバル社会で生きていくにあたってなくてはならないことであると考えています。ただ、一つの国の言語である日本語一つとっても沢山の方言があるため、「日本人である私も日本語を本当にマスターしているのか？」と言われると必ずしもそういうわけではありません。英語は世界中で話されているため、数えきれないほどの方言(イントネーション)があります。今回はそのうちの一つであり、かつ日本人に馴染みの薄いブリティッシュイングリッシュが基となっている「オーストラリアの英語」を学ぶことが出来ました。それに付随して視野を広げることもでき、グローバル社会で活躍できる人材になるための階段を一段のぼることが出来たと自負しております。</p>	
<p>【研修後の抱負】</p> <p>本研修の成果を活かし、「英語力=私の武器」と自信をもって言うように継続的に英語力の向上に努めることで、地域のグローバル化に貢献できる潜在的な能力を高めることで社会に貢献できるような人材になりたいと考えています。日本など、英語を主言語としない国や人々と関わる際には、現地の言葉を理解することでより多く・深いつながりを得ることが出来ます。とは言うものの、全世界の言語をマスターするのは容易な事ではありません。そのために、世界共通語である英語が存在しているのだと思います。英語で意思疎通が問題なく取れば、それでよいのかもしれませんが、特にビジネスでは1ミリ未満の齟齬で関係が終わってしまうかもしれません。自分の発する・使う言葉に責任を持つためにも、「英語のマスター」が必要であると私は考えています。翻訳家になるためには、英語だけでなく、日本語も正しく理解し、その他教養も身に付ける必要があり、長い年月を要する事であると思いますが、寿命を全うするまでには翻訳家レベルの英語力もマスターしたいと考えています。今回の経験を踏み台として、継続的に英語学習に励むことで「グローバル化」が進む社会に乗り遅れない人材になることで、時流に乗った社会の一員として地域に貢献していきたいと考えています。</p>	